本市の目指すべき姿の設定及びその考え方

１　背景

深刻化する地球温暖化の進行を受け、低炭素社会を早期に実現することが求められている。

本市としても、平成 21 年度（2009 年度）に策定した、地球温暖化対策の長期ビジョンである「広島カーボンマイナス７０」に基づいて低炭素社会の実現に向けた取組を推進してきた。

しかしながら、東日本大震災に伴う原子力発電所の事故により我が国のエネルギー政策が白紙から見直される等の社会経済情勢の変化や、「パリ協定」の採択や国の「地球温暖化対策計画」策定等の地球温暖化を巡る新たな動きを踏まえ、策定から 7 年が経過した広島カーボンマイナス７０を見直し、その策定趣旨や対策の方向性を基本としつつも、本市が「目指すべき姿」を明確に設定するとともに、中・長期目標を変更することとする。

２　新たな「目指すべき姿」と基本的考え方

- 温室効果ガス排出量の長期大幅削減のためには、社会経済活動の在り方を見直し、環境に配慮したライフスタイルやビジネススタイルへの転換を図るとともに、都市の低炭素化を図っていくことが必要である。
- その際、地球温暖化対策については、経済との好循環の創出ということを念頭に置き、経済成長にも資するものとする必要がある。加えて、生活の快適さや都市の利便性の向上等の福祉の増進を図るとともに、人口減少社会や超高齢社会という社会経済環境の変化にも適切に対応できるようなものとする必要がある。併せて、本市の取組を、近隣市町をはじめ国内外の都市と連携・協力することによって相乗効果を生み出し、市域を越えたより広範囲なエリアでの低炭素化を図ることも重要である。
- また、地球温暖化による気候変動のリスクを最小化するとともに、例え災害等が生じても都市の機能を維持しながら、しなやかに再生できる都市としての強靭性を備えた都市とする必要もある。
- こうした視点を踏まえ、本市の目指すべき姿を**「人が生き生きと暮らし、活力にあふれる強靭で持続可能な低炭素都市“ひろしま”」**に設定した。

≪「目指すべき姿」のイメージ≫

- 活力と賑わいに満ちたまちには、ＺＥＨやＺＥＢ等の再生可能エネルギーや革新的な省エネ技術を備えた住宅やビルが立ち並び、公共交通を中心としたネットワークの構築や都市機能の集約、スマートコミュニティの導入等も進み、エネルギー消費の少ない集約型都市（＝スマートシティ）が概成している。そこを走る自動車は次世代自動車に変わり、蓄電池代わりとなる燃料電池自動車も普及し始めている。
- 特に、国内外の多くの人が訪れる都心部では、先端技術の粋を集め、「太陽光発電」で水を分解して「水素」エネルギーを創るなど水素と水の循環による「カーボンフリー」が実現している。
- 市民には「環境に配慮する」という考えと行動が定着し、「資源の循環と低炭素化」を基本とした社会経済活動が進み、生活の快適さや都市の利便性を享受するとともに、「豊かな自然と共生した暮らしや営みを謳歌している。
- 広島広域都市圏全体では、地域特性に応じた自立分散型の再生可能エネルギー等が大規模に導入され、これを圏域内で融通し合うエネルギーの地域循環も生まれている。
- さらには、国内外の都市との連携・協力が進み、世界の多くの都市で低炭素都市づくりが加速している。
- 一方、地球温暖化による気候変動のリスクを最小化するとともに、例え災害等が生じても都市の機能を維持しながら、しなやかに再生できる都市としての強靭性を備えた、豊かな自然環境と共生するレジリエントな（※）まちづくりも進んでいる。

※レジリエンス（resilience）：自然災害や社会的犯罪、恐慌など、物理的・社会的・経済的に深刻な事態が発生しても、これらが都市に与える影響を最小限にとどめ、都市としての機能を維持しながら、しなやかに復活できる力

○目指すべき姿のイメージ図

（目指すべき姿のイメージ図を今後作成予定であり、上図はイメージとして仮置きしたものである。）

○環境と経済の関係について

下図のとおり、日本以外の欧米では、経済成長と温室効果ガス削減を同時に達成している。

これまで、地球温暖化対策が経済活動を制約する要因であると考えられてきたが、現状では、むしろ、新たな投資や消費需要を生み、技術革新を誘発していると考えられる。

図　各国の GDP 成長率と温室効果ガス排出量削減率の関係

（出典：気候変動長期戦略懇談会からの提言（平成 28 年 2 月 26 日））